慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ベネデット・ヴァルキのフィレンツェ帰還 : フィレンツェ共和制支持者と君主国の関係
Sub Title	Il ritorno di Benedetto Varchi a Firenze : il rapporto fra i repubblicani fiorentini e il principato mediceo
Author	北田, 葉子(Kitada, Yoko)
Publisher	三田史学会
Publication year	1997
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.66, No.3 (1997. 3) ,p.113(433)- 127(447)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19970300-0113

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ベネデット・ヴァルキのフィレンツェ帰還

――フィレンツェ共和制支持者と君主国の関係――

北田葉子

ベネデット・ヴァルキ（一五〇三―一五六五）は、一五〇〇年代のイタリアの知識人のうちで最も有名な者の一人であった。詩作から始まって、言語論や喜劇を書き、フィレンツェ史も執筆、また哲学の分野でも活躍し、パドヴァのアリストテリズムをフィレンツェにもたらしたことで知られている。[1] 一五四〇年代に彼の名声は高まり、学生や文学者達ばかりではなく、多くの王侯貴族がフィレンツェの彼の家を訪れたという。

ヴァルキの生涯には、フィレンツェが共和国から君主国へ転換し、その君主国が安定するまでの混乱の時代のほとんどが含まれている。フィレンツェの危機の時代は、ロレンツォ・デ・メディチが死んだ一四九二年から始まる。彼の死後、息子ピエロがフィレンツェを治めるが、一四九四年のシャルル八世のイタリア南下の際対応を誤り、貴族らの反感を買い、ピエロはフィレンツェから追放され、共和制が復活した。サヴォナローラの支配で始まったこの共和制は、ピエロ・ソデリーニによる不安定な政治を経て、一五一二年のメディチの復権と共に事実上終了し、フィレンツェは二代にわたるメディチ教皇、レオ十世とクレメンス七世に支配された。しかし反メディチ、反独裁制の気風は強く、一五二七年にはローマが皇帝軍に占領されたのを機会に共和制が復活したが、一五三〇年、クレメンス七世と和解した皇帝軍がフィレンツェを包囲し、共和国は同年八月に降伏、フィレンツェの共和制は終わりを継げ、メディチ家による君主制へと引き渡された。一五三二年にはフィレンツェは正式にメディチ家による君主国家となり、アレッサンドロ・デ・メディチが初代公爵となるが、多くの市民が彼の暴

政に反対し、一五三七年に彼は後継者を残さず暗殺されてしまった。フィレンツェはメディチ家傍系のコジモに任される。結果的にはこのコジモが、長期にわたった政治的混乱と包囲によって疲弊していたフィレンツェを、絶対主義的な国家を作り出すことによって建て直すのであるが、彼の統治の初期は、誰もこのような未来を予測することはできなかった。フィレンツェの貴族達は、コジモを傀儡として自分達が影で実権を握ろうとしていたし、亡命した共和制支持者達は、武力をもって君主国を倒そうとしていた。国としてのフィレンツェが安定するのは、一五四三年であるといわれている。[2] そしてヴァルキの死の一年前の一五六四年、コジモはそれまでの公爵（duca）に代わって大公（granduca）の称号を手にすることに成功し、以後一七三七年にジャンガストーネの死と共にメディチ家が絶えるまで、その支配は続くのである。

ヴァルキの少年・青年時代、すなわち九才から二十四才までは、フィレンツェが二人のメディチ教皇に支配されていた時代にあたる。メディチ家による支配に反発して、多くの者がメディチを追放して「自由な」共和国を取り戻す機会をうかがっていた。[3] このような状況下で、青年ヴァルキは若い共和制支持者達と友人になった。彼らは、一五二七年―一五三〇年のいわゆる「最後」の共和国（以後フィレンツェは共和国に戻ることはなく、イタリア統合に至るためこのように呼ばれる）で活躍した者達であり、その多くは後に反徒としてフィレンツェから追放されたり、財産を没収されたりした者達である。[4] 有名な共和制支持者、ドナート・ジャンノッティもヴァルキの友人の一人であった。[5] ヴァルキが彼らの影響を受け、共感を感じていたのことはまちがいない。実際彼は一五二九年の初めに、高位聖職者ジョヴァンニ・ガッディの下での安定した職を捨てて共和国軍に参加して、彼の共和制への信念を示した。[6] もっとも彼は友人達ほど積極的に政治には参加しなかった。ヴァルキ研究の第一人者ピロッティの言葉を借りれば、「フィレンツェの自由が彼にとってどれほど大切なものだったとしても、彼の『行動に対する生温い態度』のために、彼が積極的にフィレンツェの自由のために戦うことはなかった」のである。[7]

一五三二年に始まった君主制の下で、ヴァルキは一度は国外に逃れたものの、フィレンツェに戻ってきていた。しかし公爵アレッサンドロが暴君として嫌われ、多くの

共和制支持者が亡命すると、ヴァルキも、メディチ打倒を目指す亡命者達のリーダーであるフィリッポ・ストロッツィに従って、再びフィレンツェから脱出した。[8] 一五三七年一月、初代公爵アレッサンドロが暗殺されたときは、暴君暗殺を讃える詩を書き、新旧の公爵を批判した。そして同年八月、亡命者軍が新公爵コジモ一世の軍に敗れ、フィリッポ・ストロッツィが捕虜になったときも、ヴァルキはフィリッポの息子、ピエロについてヴェネツィアとパドヴァに留まり続けたのである。

しかし一五四三年初め、おそらく三月に、ヴァルキは亡命生活をやめ、コジモ一世に仕えるために、フィレンツェに帰った。それまで消極的とはいえ共和制支持に徹し、コジモ一世の一番の敵と共に亡命していたにもかかわらず、そして多くの友人達がなお共和制を理想とし、メディチの敵を自称して、亡命生活にあるにもかかわらず、なぜ彼はフィレンツェに戻ってきたのか。しかもそれまでヴァルキは宮廷生活を嫌っていたことが知られているのである。[9] どのような経緯でヴァルキの帰還は実現されたのだろうか。そしてコジモ一世の宮廷で、ヴァルキはどのような活躍をしたのか、あるいはしなかったのか。この問に答えることは、共和制の価値を信じていたフィレンツェの知識人達が、祖国の君主国への転換にどのように対応していったのかという、より大きな問いにも一筋の光を与えるものであろう。

＊　＊　＊

ヴァルキ帰還は、コジモ一世によって許された、というよりむしろ歓迎されたものであった。より正確に言えばコジモの秘書で、当時宮廷の仕事をほとんど一手に引き受けており、文学者や芸術家の管理も任されていたピエルフランチェスコ・リッチョが、[10] ヴァルキを招聘したのである。リッチョは彼と親しい文学者、ジョヴァン・バッティスタ・ジェッリにヴァルキ宛の書簡を書かせた。[11] ここにその書簡を引用してみよう。

ピエルフランチェスコ氏は今朝私に手紙で、あなたは閣下［コジモ一世］の好意でこちらに帰ってこれるようになったと伝えるよう命じました。そして、彼はあなたが誰にも知られずに、できるだけ早くフィレンツェに帰ってくることを望んでいるので、このことを誰にも知らさないよう私に言いました。ですから私がルカ［ヴァルキの親友］や他の者にこのことを言わなかったからといって、驚かないでください。私は命令

に逆らいたくないですし、彼に代わって手紙を書いているのですから。……ともかくお願いですから、この手紙を一人で読んで、誰にも、どんな親密な人にも手渡さないでください。[12]　（［　］内筆者）

この書簡から分かるのは、コジモの秘書リッチョの秘密主義である。彼はくどいほど秘密を厳守するように念を押し、フィレンツェには手紙にも書かれているルカを初めとしてヴァルキの友人が多かったにも関わらず、その誰にも知られないよう苦心している様子がうかがえる。これはヴァルキの招聘を独占して行おうとするコジモの政府の側の意図を示すものであると思われる。

それではなぜコジモの政府は、ヴァルキの友人達ではなく、自分達が彼を招聘することにこだわったのか。それは彼らがヴァルキのフィレンツェでの活動に関して、明確な意図をもっていたからである。ヴァルキは、パドヴァ滞在中、一五四〇年春に設立されたアカデミア・デッリ・インフィアンマーティに参加し、多くの講義を行ない、名声を博した。これは彼の名声をイタリアのみならず、ヨーロッパ規模で高めることになった。[13] そしてフィレンツェでも、パドヴァのアカデミアの後を追って、

一五四〇年十一月、アカデミア・デッリ・ウーミディが設立される。ウーミディは、一五四一年二月にはコジモの庇護下に入り、アカデミア・フィオレンティーナと改名された。[14] コジモはこのアカデミアにいくつかの特権を与え、その発展を促した。[15] この時期コジモは、コジモ・イル・ヴェッキオとロレンツォ・イル・マニフィコにならって、文芸を保護するパトロンのイメージを演出しようとしていた。それはまた諸外国の間でコジモの名を高め、国内にあっては彼の地位を正当化するのに役だった。しかしこのアカデミアの活動はなかなか軌道にのらず、活動の中心である講義を行う会員の数は少なかった。初年度の前半に四回、後半に三回（コジモの秘書リッチョ自身の講義含む）、一五四二年度の前半に十一回、後半に九回の講義が行なわれただけで、定期的な活動にはほど遠い。一五四二年九月には改革が行われ、講義を行なうべき会員をわざわざ指命しなければならないようになったほどである。[16] この時期のアカデミアは低調であり、その発展のために積極的に活動する優秀な人材を必要としていた。ヴァルキのように既に名声を博し、しかもアカデミアでの講義も数多くこなしている人物は、この目的にまさに適した人物だったのである。同じ時期、コジ

モは閉鎖されていたピサ大学の復興のため、イタリアの各地から教授を引き抜こうとしていた。後に大学監督官になるフィリッポ・デル・ミリオーレがイタリア北部の大学を渡り歩いて、教授達をピサに呼ぼうと交渉しているし、また芸術家の招聘も既にこの時期には始まっていた。[17] 一五四四年初め頃には、かの有名な解剖学者ヴェサリウスをピサ大学で講義させるため、彼の友人であったヴァルキもコジモの命を受けて、彼の招聘のために奔走している。[18] 長く続いた混乱のため、多くの知識人、芸術家がフィレンツェを去っており、コジモが望んだようにフィレンツェを再び文化的中心地にするためには、まず彼らを呼び戻さなければならなかったのである。ヴァルキの招聘は、このような知識人や芸術家の招聘の動きの一環であったのであるが、[19] 更に多くの知識人を招聘するためにも、ヴァルキのような元共和制支持者を雇うことは、非常に有効な宣伝でもあったのである。多くの者が、特にフィレンツェ人亡命者達は、絶対君主となったコジモのもとに帰ってくるのに恐れを抱いていた。このような恐れを払拭し、当時の君主として欠かせない要件の一つである寛大な文芸保護者としてのイメージを打ち出すことが、コジモの政府の目的の一つでもあったのである。[20] これらの目的、すなわち宮廷の知識人としてヴァルキをアカデミアで活躍させ、さらに知識人の雇用を進めるため、そしてコジモのイメージアップをはかるための宣伝としてヴァルキを使うためには、ヴァルキの友人ではなく、政府が彼を呼び戻すことが必要とされていたのである。

一方ヴァルキの方は、なぜフィレンツェに帰ってくることを選んだのか。その主な理由は単純で、経済的困難のためである。一五三八年の夏頃、ヴァルキはそれまで家庭教師として仕えていたピエロ・ストロッツィから、盗難の疑いをかけられ、解雇された。その後も貴族の子弟の家庭教師を続けるが、一五四二年の春、ストロッツィ以後最大のパトロンであったアルベルト・デル・ベーネとの友情にひびが入り、月々の給料を止められ、それがヴァルキに深刻な経済的困難をもたらした。更に、三人残っていた弟子の内二人がフランスへ行ってしまい、一五四二年十月、ヴァルキもフェラーラへ居を移すが、経済状態は悪いままであった。だからこそ一五四三年初め、ヴァルキはコジモの招聘を受けて、フィレンツェに帰ってくるのである。しかもコジモの提供した条件は、決して悪いものではなかった。かなりの額の月々の固定

給に加えて、それまでのヴァルキの借金全てが清算できる額が与えられ、しかもアカデミアでの週二回の講義以外は何の義務もなかった。[21] このような条件は、文学以外の活動で報酬を得ることが普通であった当時の文学者にとっては、破格の待遇と言えるものである。[22]

しかし何の義務もなしに報酬を得ると言うことは、一方で彼が完全に宮廷文学者となり、君主コジモの意向に依存するということをも意味する。共和制支持者であり、宮廷への嫌悪を表明していたヴァルキは、[23] コジモの宮廷でどのように活動したのだろうか。

一言で言えば、フィレンツェ帰還以後その死まで、ヴァルキは「熱心に宮廷人の仕事を果たした」。[24] 何の義務もないとはいえ、アカデミアでの活躍は期待されていたし、またコジモから何らかの依頼を受ければ、もちろん引き受けなければならない。従ってアカデミアでの多くの講義に始まって、[25] 一五五一年にはコジモの依頼でボエティウスの『哲学の慰め』をイタリア語に翻訳、一五五四年にはコジモの妃、エレオノーラの依頼でセネカの『恩恵について』をイタリア語訳、また一五四七年にはコジモの要請でフィレンツェ史を執筆するなど数多くの仕事をこなしている。[26] また多くの重要人物の葬儀に際して、公式の悼辞を述べる役割を果たし、[27] 祝祭などの公式行事にも宮廷人の一人として参加した。[28] コジモとの関係はほとんど常に良好に保たれ、「アリオストやカーロのような一五〇〇年代の文学者達が、しばしば自分が仕える君主に向けたような不満や憤慨を、コジモに向けたことはなかった」という。[29] ピロッティによれば、ヴァルキはむしろ優秀な政治家としてのコジモを尊重し、賞賛していたのである。[30]

しかし本当にヴァルキは共和制を支持するのをやめてしまったのか。ヴァルキの宮廷人への変化はどのようにしてなされたのだろうか。

それを理解する鍵は、彼の『フィレンツェ史』に隠されていると思われる。というのも、この『フィレンツェ史』はフィレンツェが共和国から君主国に至る過程を書いたものだからである。コジモの依頼で書かれたものではあるが、まさにヴァルキ自身が生きた時代を書いたこの本の中には、彼の信条とその変化が窺えるはずである。

一五〇〇年代の半ば、フィレンツェでは歴史を書くことが非常に流行した。それは世紀前半のマキャヴェッリとグイッチャルディーニという二大歴史家に負うところもあるが、むしろ共和国から君主国へという激動の時代

を経て、過去を振り返ってその変化を説明しようとする姿勢が生まれたことによるものである。[31] 君主国が誕生するまでのフィレンツェでは、どのような政治制度を採用すべきかが常に議論されていた。しかし君主国の時代の歴史家たちは、もはや政治的考察を述べようとしない。フィレンツェは君主国として安定し、平和を享受していて、政治的変化は望まれなかったからである。アルベルティーニのいう「政治から歴史へ」の視点の変化がここにある。[32]

ヴァルキもまさにこのような歴史家たちの一人であった。たとえコジモの依頼によって歴史を書き始めたとしても、彼は彼自身の立場を保ち、コジモのために歴史を改竄しようとはしなかった。むしろ彼は「憎しみや愛情なしに出来事の真実を自由に書」こうとし、[33] 多くの史料にあたったことが知られている。[34] しかしそれでも彼が何を支持していたかは、明確に『フィレンツェ史』の中に現れている。そして彼が支持していたのは、彼が仕えている君主による君主制ではなく、共和制であった。[35] 彼はかつての理想を失ってはいなかったのである。

『フィレンツェ史』の中で、ヴァルキははっきりと共和制を支持しており、「自由な」共和国が彼の理想であることは明らかである。彼は一五三〇年のフィレンツェ包囲に耐えた共和制支持者達を称賛し、「彼らのみがイタリアの誉れであり名誉である」とし、[36] さらに次のように述べているのである

もし他の諸都市が彼らのような徳や精神の強さを示していたら、あるいはフィレンツェがその大胆さと同じくらいの幸運を持ち、同盟者たちの、傭兵隊長達の、そして市民自身の大義への信念がもう少しあれば、イタリアは古代からの栄光を保ち、その由緒ある自由はまちがいなく回復され、蛮人ではないとしてもアルプスの北の人々の権力と拘束から、長い長い不幸な年月の後に、自由になっていたでしょう。[37]

一方フィレンツェの「自由」を奪ったメディチ家は、厳しく批判される。特にクレメンス七世と最初のフィレンツェの君主アレッサンドロへの批判は厳しく、クレメンス七世に対しては、彼の死について書きながら、「冷血で……彼に仕えた人々に値しなかった」と述べているし、[38] アレッサンドロの治世にいたっては「放縦で混乱に満ち、専制的で暴力的」であったとされ、[39] 彼を暗殺したロレン

ザッチョ・デ・メディチはブルータスとして称賛され、彼を讃えるエピグラムまで挿入されているほどである。[40] この二人ばかりではなく、メディチ家全体に対するヴァルキの目は、非好意的である。コジモ一世が好んで自分と重ねあわせたコジモ・イル・ヴェッキオですら、高い評価を与えられず、[41] 当時メディチ家による黄金時代の象徴として使われることもあったロレンツォ・イル・マニフィコは、[42] ほとんど言及されていない。このような中で、唯一例外として称賛されているメディチは、アレッサンドロを殺害したことで称賛されたロレンザッチョを除くと、コジモ一世その人だけである。

ヴァルキがコジモ一世を称賛した理由を、コジモが『フィレンツェ史』の依頼主であり、ヴァルキのパトロンであったからとするのは簡単であるし、実際それも大きな理由だったであろう。しかしそれだけと決めつけることはできない。実際コジモ一世はアレッサンドロと違って、国をよく治め、それまでフィレンツェが味わうことのできなかった平和をもたらした。政治よりも文学や知識の追求に情熱を傾けていたヴァルキがそれを評価しなかったはずはない。しかしもちろん共和制支持者であるヴァルキは、コジモ一世を称賛はしても、君主国を正当化することはできなかったし、またしようともしなかった。しかし共和国が平和をもたらすことができず、君主国にそれができた以上、それを容認する以外にヴァルキにとるべき道はなかったのである。

ヴァルキの『フィレンツェ史』の根底にあるのは、理想は実現され得ず、現実を容認するしかないというペシミズムである。実際ヴァルキは書いている。

> 私は何度も次のように信じそうになりました。人間に関わる出来事は、理性や思慮分別によってではなく、運命と偶然によって支配されているか、あるいは少なくとも、目が少しでも見える人ならしばしば気づくように、良いことや正しいことは、善良で賢明な人々に考えられ、予定されるが、実践にあたってしばしば妨害され、失敗に終わる。反対に、正しくないことや悪いことは、罪人や賢明ではない人々によって考えられ、予定され、何の妨害も受けずに成就するのだ、と。[43]

このようなペシミズムはヴァルキ一人のものではなく、多くのフィレンツェの同時代人と共通するものであった。「運命」(fortuna) によって支配される人間というテー

マは、すでに十六世紀初めから見られるものであったが、そのときはまだ共和国には希望があり、「運命」は人間を振り回すだけではなく、つかむべきチャンスをも与えるものだった。[44] しかし既に一五二〇年代の末、続く混乱の中でマキャヴェッリの友人であり、グイッチャルディーニとも親しかったフィレンツェ貴族フランチェスコ・ヴェットーリは、「運命は全能であり、人間はその手の中にある玩具である」と考えたし、[45] グイッチャルデーニが君主国の下で書いた『イタリア史』も、人知の及ばない運命によって支配される世界という見方が基調となっている。[46] またヴァルキと同じ頃『フィレンツェ史』を書いたベルナルド・セーニも、「運命」を全てを支配し説明する要素として使っている。[47]

このようなペシミズムとそれに基づく君主国の容認こそが、共和制支持者からメディチに仕える宮廷人というヴァルキの変化を生み出したのだとしたら、この変化、共和制支持者から宮廷人への「変節」も決して彼一人のものではないはずである。実際多くのフィレンツェ人共和制支持者（その多くはヴァルキの友人であった）が、亡命をやめてフィレンツェに帰ってくることを望んでいた。そしてこの動きはヴァルキの帰還の数年後に始まるのである。コジモに敵対していたフィレンツェ人亡命者達のリーダーの一人ヤコポ・ナルディは、一五四五年頃、亡命先のヴェネツィアでフィレンツェの大使を通じて、彼の過去の活動を謝罪し、二度とフィレンツェに迷惑をかけるような活動はしないと誓って、コジモの臣下であることを示した。[48] 一五三〇年には共和国軍のために激励演説をし、アレッサンドロ政権ではフィレンツェに戻っていたものの、コジモの即位と同時に再びメディチに対して武器をとったバルトロメオ・カヴァルカンティは、[49] 一五四八年フィレンツェに立ち寄った際、コジモと和解しようとした。[50] 熱心な共和制支持者だったシルヴェストロ・アルドブランディーニは、一五四九年の初めにコジモとの和解を望み、受け入れられた。[51] 活動的な共和制支持者で、のち『フィレンツェ史』を執筆中のヴァルキにフィレンツェ包囲中の出来事についての詳細を書き送ったことで知られるジョヴァンバッティスタ・ブジーニも、一五五〇年、フィレンツェに帰る道を模索している。[52]

このように多くの共和制支持者が、志を変えないまでも、コジモを容認し、彼と敵対するのをやめた。その点でヴァルキはまさにこの時代の典型的な知識人の一人だったのである。彼の行動と『フィレンツェ史』は、彼

が共和制という理想を守り続けながらも、君主国を容認し、君主国がもたらした平和を評価したことを示しているが、[53]それは多くの同時代人にとってたどるべき、あるいはたどらざるをえない道でもあった。

＊　＊　＊

ヴァルキのフィレンツェへの帰還は、フィレンツェにおける共和制の終焉を意味する。たとえヴァルキが積極的な共和制支持者ではなく、政治にはあまり興味を示さなかったとしても、彼はコジモに敵対する者達のリーダーと共に亡命したのであり、共和制支持者として知られていた。その彼がコジモに仕える宮廷人になり、しかもコジモから好条件で迎えられたということは、二重の意味で共和制主義の終焉を示している。すなわち一つは、コジモが既に共和制主義を大きな脅威とは考えなくなっていたという点である。コジモはむしろヴァルキが共和制支持者であることを利用していた。彼はアカデミア・フィオレンティーナのために有名な文学者としてのヴァルキを招聘し、さらに共和制支持者に対して「寛容さ」を示して、その後の知識人や芸術家の招聘のために道を開き、ひいては自らのイメージアップに利用した。それはコジモが既に政権を安定させて、国の基礎を固め、共和制支持者達を恐れる必要のないほどの力を持つようになっていたことを示している。

もう一つはヴァルキの帰還が、他の亡命者達にフィレンツェへの帰還を考えさせる引金となった、という点である。ヴァルキの帰還が他の亡命者に与えた影響は、その後の亡命者達の動きから明らかである。彼の帰還、コジモが彼に与えた好条件、その後も安定した庇護を受け続け、更に自由にフィレンツェ史を書くことを任されたことは、亡命者達を安心させ、コジモを再評価するきっかけを与えた。ヴァルキの帰還は、フィレンツェの共和制主義の終焉のメルクマークの一つであった。彼の帰還と共に、君主コジモの意識の中で、そして各地に亡命している共和制主義者の意識の中で、共和制の過去はますます現実性を失い、君主国は更に揺るぎない現実として認識されたのである。

注

（1）ヴァルキについては、以下の著作を参照。Anonimo, Vita di Benedetto Varchi, in B. Varchi, *Lezioni sul Dante e prose varie*, a cura di G. Aiazzi e L. Arbib, Firenze, 1841, pp. XV-XXXI, XXXIX-XLIII, S. Razzi, Vita di M. Benedetto Varchi, in *Lezzioni di M. Benedetto Varchi nell' Accademia*

Fiorentina, Firenze, 1590, pp. IX-XXIII, V. Fiorini, "Gli anni giovanili di B. Varchi", in *Da Dante al Manzoni*, Pavia, 1923, pp. 15-84, G. Manacorda, "Benedetto Varchi. L'uomo, il poeta, il critico", in *Annali della R. Scuola Normale Superiore di Pisa*, vol. 17, 1903, 1-161, U. Pirotti, *Benedetto Varchi e la cultura del suo tempo*, Firenze, 1971.

(2) この年に、スペイン軍に支配されていたフィレンツェとリヴォルノの要塞が返却されているが、これはフィレンツェがスペインによる支配を逃れ、正式に国として独立が認められたことを意味する。またコジモが積極的に国内政治に取り組み、行政改革を行い始めるのもこの時からである。Cf. F. Diaz, *Il Granducato di Toscana. I Medici*, Torino, 1987, p. 83. ただしスピーニは、コジモの積極的な活動が始まるのは、フランソワ一世とカール五世の間でクレピーの和がなり、コジモが当面国外政治に煩わされることのなくなった一五四四年だとしている（G. Spini, *Cosimo I e l'indipendenza del principato medicee*, Firenze, 1980, p. 210)。

(3) 「自由な」といっても、現代的な意味ではもちろんなく、「君主制」に対するいわばスローガンのようなものであり、実質は、貴族達は貴族寡頭制を、市民達（全住民という意味ではなく、貴族には劣る上層市民の意）は彼ら中心の政治を望んでいた。このため共和制支持者の間でも常に争いがあり、それが君主制を容認する道を開いた。

(4) この時期のヴァルキの友人で、共和制支持者だった者として、G. F. degli Antinori, A. Berardi, G. B. Busini, B. Cavalcanti, G. Gondi, G. B. de' Libri, L. Martelli らが知られている（Cf. Pirotti, pp. 5-6, Fiorini, pp. 10-12)。

(5) Fiorini, pp. 48-49, Pirotti, p. 11.

(6) ただし、戦争が激化した一五三〇年一月に、包囲されたフィレンツェから逃れている。

(7) Pirotti, pp. 6-7.

(8) ただしヴァルキがストロッツィについていった動機が、共和制を支持したためかどうかは不明である。ストロッツィ自身が、もともと君主制には反対ではなく、アレッサンドロと決裂したため、そしてまた彼の財力のために亡命者軍のリーダーに押し上げられたのであり、戦争を起こすことには乗り気ではなかっし、ヴァルキが彼らのためにした仕事は、メディチ打倒のための戦争への参加ではなく、フィリッポの息子達の家庭教師であった。

(9) ヴァルキ自身、一五二九年にガッディに仕えるのをやめた原因について、「宮廷生活に嫌気がさしたため」としているし（*Storia fiorentina*, Firenze, 1963, vol. 1, p. 442)、またヴァルキの友人アンニバレ・カーロはある書簡の中で、ヴァルキの宮廷嫌いを批判して、生活のために我慢して職を得るよう勧めている（Annibale Caro, *Lettere familiare*, Firenze, 1957, vol. 1, p. 32.)。

(10) リッチョについては、G. Fragnito, "Un pratese alla corte di Cosimo I. Riflessioni e materiali per un profilo di Pierfrancesco Riccio", in *Archivio storico pratese*, vol. 42, 1986, 31-83 を参照。

(11) ジェッリは靴屋でもあり、文学者として名をなした後でもその職を続けた異色の人物である。メディチ家と密着した文学者であり、トスカーナとエトルリアを結び付けて、コジモの政治を讃美する理論の提唱者の一人でもあった。アカデミア・フィオレンティーナで活躍し、イタリア語の普及のために尽力した。Cf. A. De Gaetano, *Giambattista Gelli and the Florentine Academy*, Firenze, 1976. またジェッリとエトルリア神話については、G. B. Gelli, "Dell'origine di Firenze", a cura di A. D'Alessandro, in *Atti e memorie dell'Accademia Toscana di sicenze e lettere La Colombaria*, vol. 44, 1979, 59-122, A. D'Alessandro, "Il mito dell'origine《aramea》di Firenze in un trattatello di Giambattista Gelli", in *Archivio storico italiano*, vol. 138, 1980, 339-389 を参照。

(12) *Prose fiorentine*, a cura di C. Dati, Venezia, 1751, Parte 4, vol. 1, p. 26.

(13) このアカデミアの聴衆には、パドヴァ大学の外国人学生も多く含まれていた。このアカデミアとその活動については以下を参照。F. V. Cerreta, "An Account of the Early Life of the Accademia degli Infiammati in the Letters of Alessandro Piccolomini to Benedetto Varchi", in *Romanic Review*, vol. 48, 1957, 249-264, R. S. Samuels, "Benedetto Varchi, the Accademia degli Infiammati, and the Origins of the Italian Academic Movement", in *Renaissance Quaterly*, vol. 29, 1976, 599-634. ヴァルキは、ボローニャに居を移すまで一年間、このアカデミアで中心的な役割を果たしていた。

(14) このウーミディからフィオレンティーナへの変化については、拙稿「アカデミア・フィオレンティーナの誕生：君主国家下のフィレンツェ文化の様相」『史学』六五巻4号、五九―八八頁、C. Di Filippo Bareggi, "In nota alla politica culturale di Cosimo I: l'Accademia Fiorentina", in *Quaderni storici*, vol. 8, 1973, 527-574, M. Plaisance, "Une première affirmation de la politique culturelle de Côme Ier : la trasformation de l'Académie des《Humidi》en Académie florentine (1540-42)", in *Les écrivains et le pouvoir en Italie a l'époque de la Renaissance*, première serie, vol. 2, Paris, 1973, pp. 361-436 を参照。

(15) フィオレンティーナの設立に際して、サンタ・マリア・ノヴェッラ教会内の一室がアカデミアに提供されたし、また一五四二年二月には、アカデミアの会長がフィレンツェ大学学長を兼任することになった。Cf. L. Cantini, *Legislazione toscana*, Firenze, vol. 1, 1800, pp. 195-196, Di Filippo Bareggi, pp. 535-536.

(16) Biblioteca Marucelliana di Firenze, Manoscritti, B. III 52, 9v-10v. Cf. M. Plaisance, pp. 154-157.

(17) デル・ミリオーレが活動先からコジモに宛てて送った手紙のいくつかは出版されている（L.A. Ferrai, *Cosimo di Medici, duca di Firenze*, Bologna, 1882, pp. 329-332）。有名な法学者であり、また『寓意案集』(Emblemata) の著者としても名高いアンドレア・アルチャートをピサに招聘しようとする動きについても、書簡が出版されている

(R. Abbondanza, "Tentativi medicei di chiamare l'Alciato allo Studio di Pisa", in *Annali di storia del diritto*, vol. 2, 1958, 369-403)。この他、コジモによる知識人、芸術家の招聘については以下を参照。E. Cochrane, *Florence in the forgotton Centuries*, Chicago and London, 1973, pp. 70-72, R. Galluzzi, *Istoria del Granducato di Toscana sotto i Medici*, Milano, 1974 (ristampa anastatica della edizione del 1781), vol. 1, p. 168.

(18) Cf. M. Ciliberto, "I rapporti tra Vesalio e Varchi alla luce di documenti inediti", in *Episteme*, vol. 6, 1972, 30-30.

(19) ヴァルキを招聘したリッチョは、彼の招聘に関して大学監督官のデル・ミリオーレと話し合っており (Cf. *Prose fiorentine*, Parte IV, vol. 1, p. 27, la lettera di G. B. Gelli a B. Varchi, 1542.2.3)、この点からも、彼の招聘が同時期の知識人、芸術家の招聘、特に大学教授の招聘活動の一環であったことがうかがえる。

(20) まさに同時期（一五四三年頃）ヴィジュアル・アートにおいても、それまでのアレッサンドロ政権との継続性やメディチ家の伝統の強調に代わって、コジモ個人と彼の徳を強調するプロパガンダが始められている (J. Cox-Rearick, *Dynasty and Destiny in Medici Art*, Princeton, 1984, p. 249)。「寛大な文芸保護者」としてのコジモのイメージの強調も、このような動きの一環であろう。

(21) Cf. Pirotti, p. 21. ただし、アカデミアで週二回の講義がヴァルキの義務であったという点は疑わしい。ヴァルキは彼自身が会長になった一五四五年後半期以外は、月一度の割ですら講義をしていない。

(22) ヴァルキ自身、かつては法学者として働いていた (Pirotti, pp. 9-10)。

(23) 注(9)を参照。

(24) Pirotti, p. 10.

(25) 記録に残っているだけで、一五四三年に六回、四四年に二回、彼が会長になった四五年には二八回、四六年には二回、四七年には三回、四八年にも三回、五十年に一回、五二年に三回の講義を行なっている（五三年以後は記録の欠落のため不明）。

(26) Boezio Severino, *Della consolazione della Filosofia*, tradotto da lingua latina in volgare fiorentino da Benedetto Varchi, Fiorenza, 1584, L. Annaeus Seneca, *De benefizii*, tradotto in volgar fiorentino da M. Benedetto Varchi, Firenze, 1554.『フィレンツェ史』は、ヴァルキがコジモに読んで聞かせていたと言われるが (Razzi, p. XVII)、一七二一年まで出版されなかった。

(27) 一五四三年にはコジモの母マリア・サルヴィアーティ、一五四八年にはフィレンツェ軍総指揮官ステファノ・コロンナ、一五六四年には画家・彫刻家のミケランジェロといった重要人物の悼辞を述べている。

(28) 一五六五年のコジモ一世の長男フランチェスコとジョヴァンナ・ダウストリアとの結婚の祝祭の際、ヴァルキは老齢にもかかわらずジョヴァンナの付添いをしている (Razzi, p. XXII)。同年12月、ヴァルキは死亡。

(29) Pirotti, p. 32. ヴァルキはおそらく非常に厚遇されていたために、フィレンツェに帰ってくるとすぐ多くの敵を作り、彼らのために窮地に立たされたこともあったが、結果的にはコジモの寵愛を失うにはいたらなかった (cf. Pirotti, 24-29, Caro, *Lettere familiare,* vol. 1, p. 299)。

(30) Pirotti, pp. 32-33.

(31) R. Von Albertini, *Firenze dalla repubblica al principato, storia e coscienza politica,* tr. C. Cristofolini, Torino, 1970, pp. 306-313.

(32) Albertini, p. 308. この変化は君主制下で政治の中枢から遠ざけられて、『イタリア史』を書いた頃のグイッチャルディーニにも見られる (Cf. Albertini, pp. 225-246.)。

(33) Varchi, *Storia fiorentina,* Firenze, 1963, vol. 1, p. 17.

(34) Cf. M. Lupo Gentile, "Studi sulla storiografia alla corte di Cosimo de' Medici", in *Annali della R. Scuola Normale Superiore di Pisa, filosofia e filologia,* vol. 19, 1906, pp. 91-109, Id. "Sulle fonti inedite della Storia Fiorentina di Benedetto Varchi", in *Studi storici,* vol. 14, 1905, 421-427.

(35) コジモはヴァルキが自由に歴史を書くことを許していた。その理由はおそらく、既に君主国の基礎が固まっており、共和制支持者達を恐れる必要がなくなっていたこと、そして悪評高かったアレッサンドロやクレメンス七世とは一線を画すだけの余裕ができたためであろう (Cf. M. Lupo Gentile, "Studi sulla storiografia alla corte di Cosimo de' Medici", pp. 90-91)。実際コジモはその治世の後期には、共和国との繋がりを強調するようになる (Cf. H. T. Van Veen, "Republicanism in the Visual Propaganda of Cosimo I de' Medici", in *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes,* vol. 25, 1992, 200-209)。

(36) Varchi, *Storia fiorentina,* vol. 2, p. 9.

(37) *Ibid.,* vol. 1, pp. 612-613.

(38) *Ibid.,* vol. 2, p. 329.

(39) *Ibid.,* vol. 2, p. 324. pp. 373-375 も参照。

(40) *Ibid.,* vol. 2, pp. 580-581.

(41) *Ibid.,* vol. 1, p. 31-32. コジモ一世とコジモ・イル・ヴェッキオの重ね合わせについては、J. Cox-Rearick, *op. cit.,* pp. 240-250 を参照。

(42) Cf. P. F. Giambullari, *Apparato e feste nelle nozze dell'Illustriss. Sig. Duca di Firenze, e della Duchessa sua consorte,* Firenze, 1539, p. 38, A. C. Minor and B. Mitchell (eds.), *A Renaissance Entertainment. Festivities for the Mariage of Cosimo I, Duke of Florenze in 1539,* Colombia, 1968, p. 141.

(43) Varchi, *Storia fiorentina,* vol. 1, p. 25

(44) F. Gilbert, *Machiavelli and Guicciardini,* Princeton, 1965, pp. 40-41.

(45) *Ibid.,* p. 251, Cf. F. Vettori, *Scritti storici e politici,* Bari, 1972, p. 136.

(46) Gilbert, *Machiavelli and Guicciardini,* pp. 285-288.

(47) Albertini, p. 332. B. Segni, *Istorie fiorentine,* Milano, 1857, vol. I, p. 134.

(48) Cf. A. Pieralli, *La vita e le opere di Iacopo Nardi*, Firenze, 1901, vol. 1, p. 140. このようにコジモの臣下であることを示す一方でナルディは、一五五三年から書き始めた『フィレンツェ史』ではなお、共和制主義と「自由」への理想を捨てていない。Cf. Albertini, pp. 314-320.

(49) カヴァルカンティについては以下を参照。Albertini, pp. 166-178, B. Cavalcanti, *Lettere edite e inedite*, a cura di C. Roaf, Bologna, 1967, pp. XIII-LCCI.

(50) ただし彼が仕えていたフェッラーラ公と反メディチのサルヴィアーティ枢機卿に止められ、果たせなかった (B. Cavalcanti, *Lettere edite e inedite*, p. XLVII)。

(51) Cf. *Dizionario biografico italiano*, Roma, vol. 2, 1960, p. 113, F. Bonaini, "Riconciliazione di Silvestro Aldobrandini con Cosimo I de' Medici", in *Giornale storico degli archivi toscani*, vol. 2, 1858, 129-136.

(52) G. B. Busini, Lettere al Varchi, in B. Varchi, *Opere*, Trieste, 1858, vol. 1, p. 508. ブジーニについては *Dizionario biografico italiano*, vol. 15, 1972, pp. 534-537 を参照。

(53) 実際コジモがフィレンツェにもたらした平和は、皇帝とフランス王の争いに巻き込まれていたイタリアでは、高く評価されていた。前述したブジーニは、一五五〇年にヴァルキにコジモとの仲介をしてくれるよう頼みながら、イタリアでフィレンツェほど安全な場所はないと述べている (Varchi, *Opere*, vol. 1, p. 158)。